



次代へと 流れ続ける 京の水

水力発電発祥の地、
京都・蹴上を訪ねて



琵琶湖の水で京の都を潤す——それは京都人にとって積年の悲願だった。かの平清盛や豊臣秀吉も挑んでは挫折し、ついには匙を投げたという。ときの為政者さえなし得なかつたその夢がようやく実現したのは、一八九〇年、平安京に遷都されてから実に一〇九六年後のことだ。この「京都千年の夢」を叶えたのは、どんな人たちだったのだろう。また彼らの偉業は、京都に、そして日本に、何をもたらしたのだろうか……。

玉岡かおる 1956年兵庫県生まれ。神戸女学院大学文学部社会学科卒。中学教諭を務めた後、87年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』で作家デビュー。主な著書『お家さん』『をんな紋』『天涯の船』『タカラジェンヌの太平洋戦争』など。TBS「ブロードキャスター」、関西テレビ「スーパーニュースアンカー」などのコメンテーターとしても活躍中。日本河川協会理事、いなみ野パールプロジェクト推進実行委員会会長。



琵琶湖疏水

明治期に築かれた琵琶湖疏水は、大津市観音寺から京都市伏見区までを結ぶ第1疏水(全長約20km、1890年完成)、全線トンネル式で、蹴上で第1疏水と合流する第2疏水(全長約7.4km、1912年完成)、蹴上から分岐して左京区北白川に至る疏水分線(全長約8.4km、1890年完成当時:現在は約3.3km)からなっている。



琵琶湖疏水記念館

琵琶湖疏水竣工百周年を記念して1989年にオープン。疏水工事の測量図や、工事の様子を描いた絵画、インクラインの模型など、さまざまな資料を展示。また疏水の流れに面した中庭には、第1期の蹴上発電所で使用されたベルト式水車やスタンレー式発電機も展示されている。入場無料。毎週月曜(祝日の場合は翌日)と年末年始休館。



ベルト式水車

一石二鳥ならぬ、一石七鳥!

春の観光シーズンを迎えた京都・東山。新緑の薫りが漂い始めた通りには、観光客が引きも切らず行き交っている。人並みが途切れると、涼しげな水音が気づく。それが京の街を潤す「琵琶湖疏水」の流れだった。琵琶湖疏水は、一八六九年(明治二年)に東京が首都になり、火が消えたように寂れた京都を再興するため、一八八一年(明治十四年)、第三代京都府知事の北垣国道によって計画された。目的は、「水車を使って新たな工業を興す」とこと、「舟運を拓いて物流を活性化させる」とことというのが、よく聞く説明。でも実はそれだけではなかったんです、と話してくれたのは、琵琶湖疏水記念館の井垣成量館長。

「日本国内には約四百の疏水がありますが、そのほとんどは灌漑など単一目的のもの。でも琵琶湖疏水は、七つもの目的を持つ総合開発事業だったんです」

そう教えられ、北垣が著したという「起工趣意書」を読むと、確かに、①製造機械(水車利用)、②運輸(舟運)、③田畑の灌漑、④精米水車、⑤防火、⑥井泉、⑦衛生、の七項目が列記されていた。まさに総合開発プロジェクト。一石二鳥どころか、一石七鳥を狙ったというのだから恐れ入る話だ。

しかも各項目には、「水車なら安全で煙霧の害の心配もない」「舟運を拓けば運賃が安くなり、流通が促進される」「清浄な水があれば伝染病の蔓延も防げる」等々、経済から環境、市民生活まで考えた、疏水の効用が、具体的数値とともに、事細かに書き連ねられている。その記述は、今私が読んでも思わずうなずいてしまう説得力に満ちていた。

主任技師は二十三歳

疏水記念館から南禅寺へ。井垣館長の案内で、境内を横切る水路閣を見て、疏水伝いに小道をしばらくさかのぼると、やがて見通しのよい広場に行き着いた。このあたりが蹴上

水路閣

南禅寺境内を横断するアーチ型の水道橋「水路閣」は、全長93.2m、幅4m、高さ13m。分線の高さを維持し、かつ後背地にある亀山天皇陵を避けるため、このような形になった。ローマ水道橋を模したとも言われるその外観は、古都の景観を損なうとして、建設当時は福沢諭吉など多くの文化人に酷評されたが、今では東山の名勝の1つ。今も水が流れている。



田邊朔郎銅像

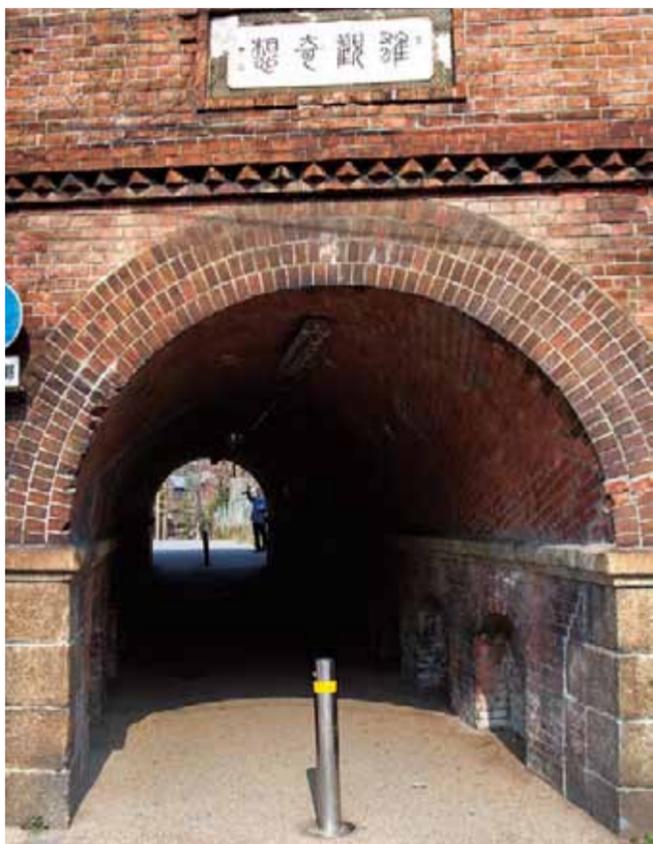
1861年、江戸に生まれた田邊朔郎は、工部大学校土木科卒業と同時に、琵琶湖疏水工事に従事。のち北海道の鉄道開発などを指揮した後、京都帝国大学教授となり、終生を京都で送った。



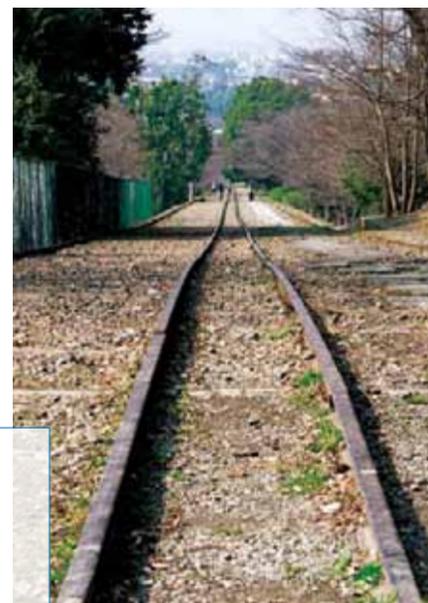
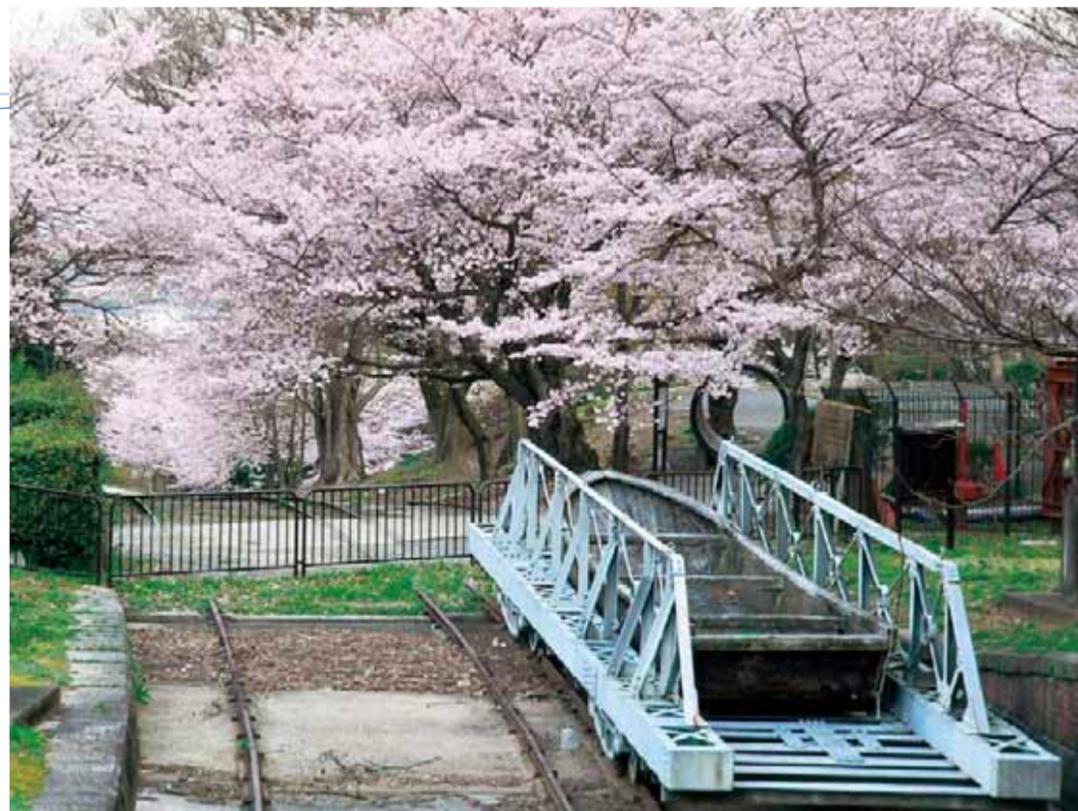
船溜。かつて、三十石船を載せた台車が往来するインクライン（傾斜鉄道）の始発点として賑わった場所のこと。高低差のある京の街を船で行き来させるため、船を山に登らせた。発想にも驚く。

今は静かな広場の一面に一体の銅像を見つけた。インクラインを見つめるように立つこの銅像の青年こそ、疏水工事の主任技師を務めた田邊朔郎だった。いかにも理知的な容貌だが、何よりその若々しさに驚かされる。それもそのはず、田邊は当時まだ二十三歳の青年だったというのだ。といっても、もちろんただの青年ではない。工部大学校（現東京大学工学部）でトンネル工事や疏水について学んだ英才で、卒業論文もずばり「琵琶湖疏水計画」。卒論作成中の田邊と面談した北垣知事は、彼なら託せると、翌年の卒業と同時に採用し、重任に当たらせることにしたという。それにしても京都の復興を賭けた大事業を、大学を卒業したばかりの一青年に託すなど、このうえない英断だ。抜擢した北垣もすごい。臆せず引き受けた田邊も見事と





レンガが、らせん状に積まれた「ねじりまんぼ」



インクライン

琵琶湖疎水建設の主要目的であった舟運確保のため、蹴上と伏見の2カ所にはインクライン(傾斜鉄道)が建設された。うち蹴上インクラインは水平距離582m、高低差36m。三十石船まで搭載可能な台車をケーブルで上下させるしくみで、動力には蹴上発電所で発電した電気が用いられた。1891年運行開始し、1948年に運行停止したが、現在も形態保存されている。

疎水事業に水力発電を加える「希有ナル幸福」

言うしかない。
思えば明治維新を成し遂げた人々も、多くは三十歳前後の志高き青年だった。彼らに続いた明治の経済人や技術者にも、自身の安楽など考えず、国家百年の大計のため尽くした人が多かった。田邊もそんな一人だったに違いない。

今はレールだけが残るインクラインを三分の一ほど下り、「ねじりまんぼ」の名で知られるトンネルを抜けると、右手にレンガ造りの建物が目に留まる。これが蹴上発電所(第二期建物)。

日本初の事業用水力発電所となった蹴上発電所(第一期)だが、実は当初から計画されていたものではなかったようだ。どうやら疎水工事の最中、水車利用の視察のため渡米した田邊が、コロラド州アスピンの銀山で実用後間もない水力発電所を見て、急きょ導入を決意したのだという。

もっとも、田邊は以前から水力発電に関心を持っていて、米国視察も、実は水力発電を念頭に置いていたという説もある。いずれにしろ、初めて水力発電所を目的の当たりにして、即座にその将来性を確信した田邊は、工事の一部中断を電報で指示し、帰国後、直ちに計画変更を提案。アメリカでもようやく実用化したばかりの水力発電を疎水事業に生かせるのは「実ニ希有ナル幸福」と主張した、と伝えられている。

この素早い決断が日本初の水力発電を京都にもたらしたわけだが、既に着工している公共事業の見直しは、決してたやすくはなかったはず。実際、とりあえずは規定路線のまま進めよう、という声も多かったらしい。それでも将来のために「今やらないと」「自分がやるんだ」という田邊の、痛切なまでの使命感に心を揺さぶられる。そして青年技師の主張を支持した当時の京都実業界——老舗の旦那衆の心意気にも敬服する。これを機に、京都は日本初の電気鉄道を走らせ、産業の電化も推進した。加えて日本では多くの水力発電所がつく



蹴上発電所(第2期)の正面に掲げられた「亮天功」(てんこうをたすく)の石額

蹴上発電所

第1期蹴上発電所は1890年に着工され、翌91年に運転を開始(完成は1897年、出力1760kW)。電力供給地域は当初、発電所から20町(約2km)以内で限定されていたが、送電設備の充実により、順次拡大された。1895年には蹴上発電所からの電気を受け、塩小路(現京都駅前)～伏見油掛間6.4kmで日本初の電気鉄道が開通した。また「京都市3大事業」の一環として、1912年に第2疏水が完成。同年、第2期蹴上発電所も運転を開始した(出力4800kW)。その後、電力需要の増大にこたえ、1936年に第3期発電所が完成(出力は当初5700kW、現在は4500kW)。戦前までは京都市営事業として運営され、1942年、関西配電(関西電力の前身)に移管された。



られ、エコエネルギーの恩恵を受けることになったのだ。

古都で見つけた 未来へのヒント

田邊がつくった初代の蹴上発電所(一八九一年運転開始)は現存せず、レンガ造りの第二期は建物だけが残る。そして一九三六年に竣工した第三期の蹴上発電所は、現在、関西電力が管理し、今も現役で京都の街に電気を送り続けている。

日本の電力の主役は、その後、水から火力へ、さらに原子力へと移り変わったが、温暖化問題がクローズアップされるなか、環境に優しい水力発電が再び見直されつつある。そのルーツである京都が、百年という時を経て「京都議定書」の地になったのも何かの縁かもしれない。今なお京都人の生活を支えているこの水力発電所は、まさに生きた産業遺産だ。

発電所を後にし、疏水に戻った。豊かな水を通すトンネルの洞門には、田邊が揮毫したという「藉水利資



琵琶湖疏水から蹴上発電所(第3期)に水を引いている管



- ① 琵琶湖疏水記念館
- ② 疏水分線・哲学の道
- ③ 水路閣
- ④ 田邊湖郎銅像
- ⑤ インクライン
- ⑥ ねじりまんぼ
- ⑦ 蹴上発電所／蹴上変電所

人工（水利をかりて人工をたすく）の書が見てとれる。
 資源に恵まれない日本にとって、水はかけがえのない財産。だからこそ、明治の人も「水の力」で未来を切り拓こうとしたのだらう。国や都市を百年、千年単位で考える。私たちはそのための知恵も技術も積み重ねてきたではないか。蹴上の地を巡りながら、先人たちがそう言って、未来に向けて背中を押ししてくれている気がした。 **躍**